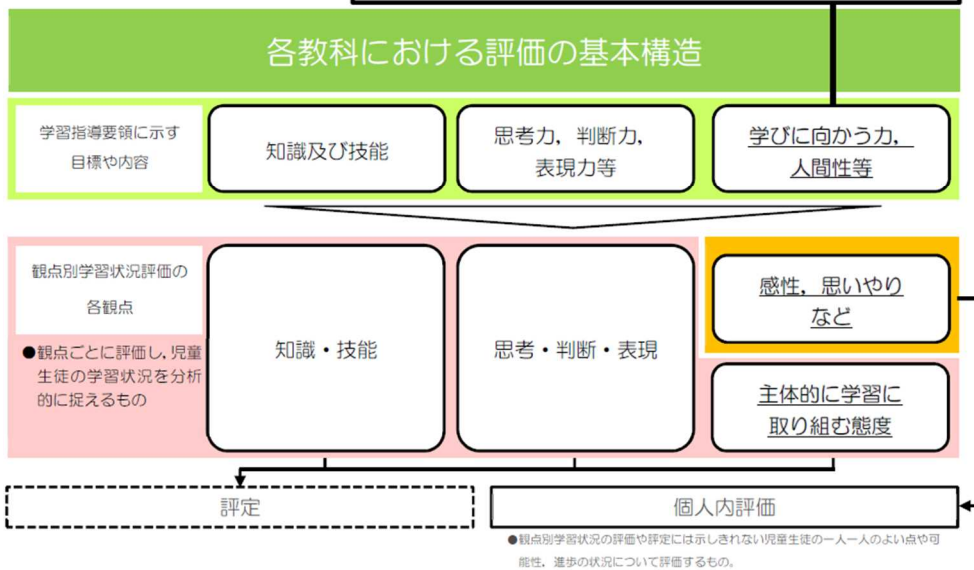


各教科の学習評価

学びの連続性の観点から、知的障害者である児童生徒のための各教科の目標や内容について、小学校等と同様に、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理されました。各教科の学習評価についても、小学校等と同様に、観点別学習状況の評価を行います。

ここで、各教科における評価について確認します。

「学びに向かう力、人間性等」には
 ①「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取ることができる部分と、
 ②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価を通じて見取る部分があります。



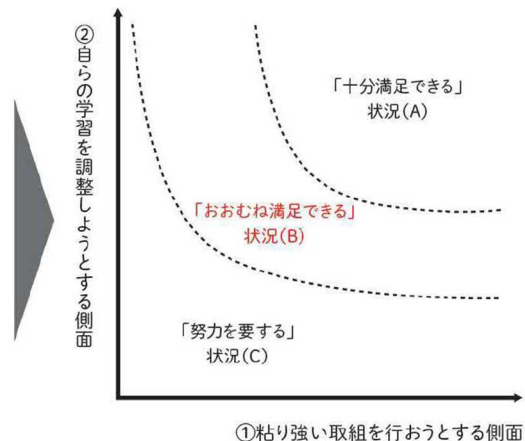
（文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック」）

「感性、思いやりなど」は観点別学習状況の評価の観点ではないため、学習評価としては行いません。しかし、知的障害を有する児童生徒においては、自己肯定感等を高めるために大切にしたいポイントと考えます。授業の中で児童生徒の良さを見付け、その都度、称賛するといった評価をすることが必要です。

※観点別学習状況の評価についてはp. 1-18でも紹介しています。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる。
- これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しようとして粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



（文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「学習評価の在り方ハンドブック」）